

河野 勝彦ほか執筆

環境思想キーワード

尾関周二, 亀山純生, 武田一博編著

青木書店 2005



教員文庫所蔵



「自著」と言えるのか疑問である。三十人余の執筆者の一人にすぎないし、キーワード150項目のうち私が担当したのは、7項目にすぎない。しかし、私がかかわった本であることは事実であるので、本書の紹介をかねて、環境をめぐる思想状況、問題状況に触る機会としたい。

「環境」のつく学問領域は、現在、限りなく増殖している。従来の学問領域の頭か尻尾に「環境」をかぶせれば、新しい学問が誕生し、大学の新学部や新学科の名称として使うことができるほどである。環境経済学や環境社会学、環境科学や環境工学から、都市環境学、人間環境学、子育て環境学などまで、「環境」のつく学問領域は広い。しかしその広さに比例して、「環境」の意味は拡散している。

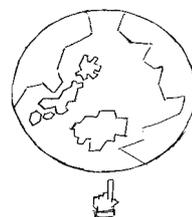
本書にも、「環境権」「環境正義」「環境と国際条約」「公共性と環境問題」「環境と法」「エコマネー」など社会科学にかかわる項目や「資源・エネルギー問題」「人口問題とエコロジー」などの自然科学にかかわる項目もあるが、本書の主眼は、1970年代以降、深刻さを深めてきた環境破壊、環境危機を前にして様々な立場から提唱された「環境思想」を、キーワードにそって整理し、それぞれの思想に対する問題点を指摘する点にある。

「環境」とは「周りを取り囲む外界」のことであり、人間にとっての環境には、自然環境、社会環境、文化環境がある。生命体が存続するためには、常に呼吸や排気、摂取や排泄などの新陳代謝活動を行わねばならない。もしこの活動が停止すれば、生命体は死に至る。良好な自然環境が必要であるが、人間は、自然的存在であると同時に、社会的存在であり文化的存在であるゆえに、「人間になる」ためには、さらに一定の社会環境や文化環境が必要である。もちろん、この「自然」「社会」「文化」は、それぞれ切り離された別個の世界ではなく、相互に入り組んでいる。私たちが住んでいる世界は、社会と文化によって改変された自然であって、私たちは原生的自然のなかで生活しているのではない。(参照項目:「原生的自然と二次的自然」「自然」という言葉)

今日、「自然を守れ」「環境を守れ」ということに、異論を唱える者はいない。しかし、「なぜ自然や環境を守らなければならないのか」と環境保護の根拠が問われた場合には、その回答は必ずしも一致しない。大方の人は、「自然環境の破壊や汚染は、人間に害をもたらすから」と回答するが、少なくない環境論者は、それは「人間中心主義」であって、自然をあくまで人間にとっての「道具」「手段」としてしか見ていない、自然には「人間にとっての価値」以外にそれ「固有の内的価値」があると批判する。(参照項目:「自然中心主義と人間中心主義」「自然の固有の価値と内的価値」「自然の保護 保全と保存」「自然の権利」)

「環境思想」は、「思想」である限り、現状変革への指導理念を提起しようとする。しかし、多くの環境論者による思想的提起はあるが、未だ信頼に足るグランドセオリーは現れておらず、部分理論に止まっていて、この中から先の見えてくるものが現れるかどうか、見通しは厳しい。そして、ただ環境危機のみ深化するのがもどかしい。しかし、部分理論ではあっても、環境保護が求められる場面は多様であり、そこで使える思想はいくつもある。

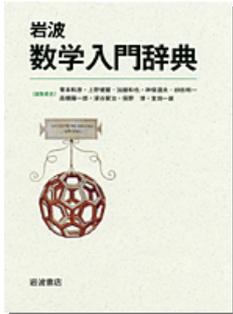
(この かつひこ 文化学部教員)



Environment
→ Social
Home
Nature

カット

宮崎 良輔 (外国語学部3年次生)



青本和彦ほか編

岩波数学入門辞典

岩波書店 2005



この入門辞典は数学全般にかかわる比較的初等的な段階に登場する用語や人名を取り上げて簡潔に解説したものである。

第1の特徴は、できるだけやさしい言葉遣いを用いて初等的記述に徹したことである。例えば、簡単な例を通して一般的・抽象的な概念や用語の説明を行なった箇所も多い。そのため、必ずしも一般性のある完璧な解説になっていないものも多々ある。というのは、あまりに厳密な説明を徹底すると、前提がはっきりしてない初等的な段階では、読者が、何を言っているのかわからなくなり全く興味を失ってしまう恐れもある。読者はまず用語なり概念を直観的に把握し、次に論理的に厳密な解説へと向かうのが自然な学習方法だと思うからである。

第2に用語の歴史的な記述や人名などを多く取り入れて、多面的に興味を持てるようにしたことである。数学は元来、論理的議論を展開していく学問である。従ってふつう教科書では、補題、命題、定理およびそれらの証明という風に進んで行く。それはそれとして有意義な習得方法ではある。しかし、別の方法として、用語や人名あるいはそれらの現れてきた歴史的由来をたどり、“ああそうなんだ”“そういうことだったのか”という様に重層的・立体的に把握していくことも重要である(人類の歴史における数学に対する理解は、一人の成長過程でのそれと似通ったところがある)。

第3に、そしてある意味で最も強調したいのは次の点である。高校までの数学と大学のそれとの目に見えない壁を取り除き、両者のよりスムーズな繋がりを与えるように意を用いたことである。現状の数学教育において、高校から大学への移行は必ずしもスムーズに行っているとは言えない。

実例をあげる。平面三角形は中学では3頂点を与えてそれらを線分で結ぶ図形として定義される。しかし大学では通常、3頂点、線分およびそれらによって囲まれる“無限集合”として定義される。従って、3角形の重心は、中学では単に3頂点の重心を求めればよかったのに対し、大学ではこの無限集合

の点の座標の平均値として重積分を用いて定義される。この“無限集合”を理解するのは学部生にとって実は至難の業なのである。入門辞典はこれらの隙間を埋めるのに少しは役立つのではないかと考えている。

第4に執筆陣に関連の専門家を加えて応用数学の用語を充実させたことである。数学は現在、理工系のみならず文系の分野にも広く利用されている。この辞典は数学に関心があり、数学を利用したいという学生や社会人にも役立ってもらえるのではないかと考えている。

当然のことながら、用語や人名の解説にはただ1通りの方法があるわけではない。実際、辞典の作成過程で、編集者間の意見の相違を見、ときにははげしい議論の末にようやく結論に到達したものもある。また、用語の解説は言葉遣いを含めて時代を反映して、ある程度変遷を余儀なくさせられるものでもある。読者自らがこの辞典を愛して活用していただき、様々なご感想や批判をしていただければ、より優れた辞典として成長して行けるのではないかと私は思っている。

(あおもと かずひこ 理学部教員)



カット

安藤 京平(経済学部3年次生)



今井 薫著

保険契約における企業説の法理

千倉書房 2005



「保険とは何か?」という問題は、われわれの業界では、つねにでありのテーマである。14世紀のイタリアで誕生したといわれるこの制度の性質をめぐって、わが国でも過去激しい議論が戦わされてきたものだ。その結果、わが国の保険学では、これを不毛の議論として、その性質に関する論争を半ば封印した。しかしながら、取引法領域でのその特殊性は、他の契約類型とは明らかに際立つもので、近時の保険業界の不祥事を見ると、もう一度考え直す契機となるように思われたのである。

本書のタイトルに登場する「企業説」は、わが国では長く「技術的特徴説」と呼ばれてきた。これは、この説を紹介した京都大学の小島昌太郎博士が、「仮に技術的特徴説とでも呼んでおくことにしよう」といったため、そのまま定着してしまったことによる。わが国の技術的特徴説は、オーストリアの保険学者フプカの著作から、小島博士がわが国に紹介したことに始まるが、この説の主唱者はフプカではない。フプカが、その著作の中で、イタリアのヴィヴァンテ(ローマ大教授)の学説を紹介していたのだ。もちろん、誠実な小島博士はこの事実を明らかにし、「私はイタリア語を解しないので、本当は何て呼ばれているのか分からない」と仰っていた。

ところが、恐ろしいもので、小島先生の配慮にもかかわらず、この説はあたかも最初から「技術的特徴説」という名称であったかのごとく定着しただけでなく、誤った内容で紹介されるという悲運に遭遇する(誰も中身が分からないということは、誰も自由に脚色できるということだ)。わが国で、勝手な「企業説」解釈が横行したのは、第二次大戦敗北という「非商法的」事実も関係する。すなわち、戦争に敗れたイタリアでは、反体制派としてイタリアを追われていたアスカレリ教授が、旧体制派への復讐の念に燃えながらローマ大学に復帰したのである。彼が携えてきた新学説「新損害填補説」は、まったく斬新な契約理論であったため、怒れるアスカレリの鉄槌の前に団体主義的な「企業説」はあっ

という間に通説の地位から転落し、これを顧みる人も無くなったからだ。

私がイタリア商法を学んだ時代は、アスカレリとともに同じ立場からイタリア商法をリードした大学者ドナーティ・ローマ大教授全盛の時代であり、ドナーティの体系書によって教えを受けていたため、私もまた「新損害填補説」の徒といってよかった。だが、いつしかイタリアの通説の地位は、その後のフェリやファネリなどの商法学者の手でふたたび企業説へと回帰しはじめたのである。

というわけで、本書は、まともに紹介されたことのない「企業説」について改めて正しく紹介することを目指している。しかし同時にまた、本書では野心に満ちた優れた学者達による「知の戦い」の興亡をも語りたかった。およそ大学人は、このような「知の戦場」にいて、学問の神は、この彼らに勝利の栄光を、あるいは与え、また無慈悲に奪う。本書の中に、そのようなドラマを感じていただければ、それもまた著者の喜びではある。

(いまい かおる 法務研究科教員)



カット

安藤 京平(経済学部3年次生)



田尾雅夫, 佐々木利廣, 若林直樹編

はじめて経営学を学ぶ

ナカニシヤ出版 2005



単著ではない著書を対象に、自著を語る資格があるのか悩むものがあるが、心理学プロパーの田尾と社会学プロパーの若林とともに編者の一人として関わった経緯や経営学関連の著書出版に取り組む出版社の意気込みや思い入れを紹介したいと思ひ快諾した。

伊丹敬之・加護野忠男共著『ゼミナール経営学入門』(日本経済新聞社)を筆頭に経営学入門書をうたった概説書はたくさんあるが、いくつかのキーワードにそって最新の経営学の全体像を平易に提示したテキストは意外に少ないのではないかという問題意識から編纂された著書である。学会で活躍されている関西中堅研究者を集めるという所期の目的もある程度達成された。さらに社会学や心理学から経営学を考えている執筆者が多いのも特徴である。

本書の大きな特徴は、これから経営学を学ぼうという学生や社会人に対して、最新のトピックスを含めて全体像を4部構成で分かりやすく伝えようとしていることである。まず第部「会社って何?経営って何?」では、企業が戦略を立て競争優位を獲得しネットワークで経営し組織をデザインし企業文化を創るという一連の過程をダイナミックな視点から論述している。

続いて第部「ビジネスマンとして生きるってどういうこと?」では、自分のキャリアを作りリーダーシップ能力を育て部下のやる気を引き出し起業家として行動し学習するという「ヒト」に関わる過程を扱う。さらに第部「マネジメントの最前線ってどんなの?」では、NPO、製品イノベーション、環境問題、社会的責任、女性労働など経営学で旬になっているテーマを取り上げる。そして最後の第部「はじめて経営学を学ぶ」では、ゼミや授業で経営学を学ぶ方法、レジュメの書き方、レポート作成方法、プレゼンテーションの仕方のヒントを提供する。

本書の第2の特徴は、59のキーワードによって経営学の全体像を語るという編集方針を立てたことである。この編集方針は、執筆者にとっても読者

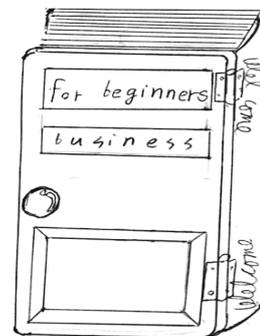
にとっても大きな意味がある。執筆者にとっては、何を捨て何を残すかを考えながら、これだけは覚えて欲しいというキーコンセプトを厳選し、それをもとに全体を語る事ができたという点で大きな意味があった。また読者、とくに初めて経営学を学ぶ学生は、枝葉末節に囚われずコアの部分が何かを明確にすることができる点で効率的であろう。

59のキーワードの中には、学説といわれるものや有名な経営学者の名前は全く出てこない。このことの功罪はさまざまではあるが、経営学の歴史から始める経営学入門書とは一線を画した著書になったことは確かである。

本書の第3の特徴は、第部「マネジメントの最前線ってどんなの?」によって、進化しつつある経営学の動きの一端を紹介しようという目論見である。これまでの経営学入門テキストでは、第部で扱うようなテーマは、ほとんど触れられない。しかし21世紀の経営学は、NPO、地球環境、企業倫理、女性問題、障害者支援、企業福祉、地域活性化、など多くの社会的課題を扱わざるを得なくなる。むしろこうした社会的課題に果敢にチャレンジしていくことが求められているようにも思われる。

はじめて経営学を学ぶ学生や社会人は、本書で扱われたテーマのなかで夢中になれるものを探し出すことからはじめてもらいたいと願っている。

(ささき としひろ 経営学部教員)



カット

宮崎 良輔 (外国語学部3年次生)